



「平治物語絵巻」三條殿夜討 ポストン美術館所蔵。平治の乱（1159年）

桶川にゆかりの武蔵武士

あ だ ち と お も と 足立遠元

～実はこの人、鎌倉殿を支えた
13人の合議制の一人なんです～

後編

詳しくは文化財課・歴史民俗資料館
☎786-4030

鎌倉幕府を支えた13人の家臣団に「足立遠元」という人物があり、大河ドラマ「鎌倉殿の13人」(NHK)にも登場します。皆さんは足立遠元が桶川にゆかりがあるをご存知でしょうか。前回(広報おけがわ3月号)に引き続き、足立遠元についてご紹介します。

足立遠元は どのような人物だった？

足立遠元は、文武両道の武将であったといわれています。それは武士として数々の戦で功績をあげ、鎌倉幕府の官僚としても才を発揮したことからも推測できます。

遠元が本格的に歴史に登場するのは1159年(平治元年)の「平治の乱」です。平氏一門が権勢を振るっていた当時、その中心にいた信西(藤原通憲)と平清盛を倒すために藤原信頼と源義朝(源頼朝の父)が手を結び、クーデターを起します。足立郡司であった遠元はこの時、南関東に勢力を持っていた源義朝に従って参戦します。この戦いで武功をあげた遠元は「右馬允」という官職を受けました。

最終的に平治の乱は、平氏側の勝利に終わり、遠元ら源氏側は敗走することとなります。平治の乱後に平

氏は勢力を伸ばし、武蔵国においても平清盛の子・知盛が武蔵守に任じられ、遠元が郡司であった足立郡も平氏の支配下となります。こうした中で、遠元も歴史上からしばらく姿を消すこととなります。

1180年(治承4年)8月、平治の乱に敗れ伊豆国(現在の伊豆半島、伊豆諸島)に流刑されていた義朝の子・源頼朝は、平氏追討の命を受け挙兵します。

相模国石橋山において一度は敗戦したものの、真鶴から安房国(現在の千葉県南部)へ逃れ、上総氏や千葉氏など在地の武士を味方につけ、勢力を増しながら武蔵国に入国しました。この時、遠元は、豊島氏や葛西氏とともに真っ先に頼朝を出迎え加勢しました。この忠誠心に応えた頼朝は早速に足立郡を遠元に安堵し(領地を承認すること)、遠元は足立郡司に復帰しました。

1184年(元暦元年)、頼朝は公文書や財政など政務の中心を司る「公文所」を設置します。この機関の役人である「寄人」には京都から優秀な官僚たちが招かれましたが、遠元は武蔵武士として唯一、寄人の一人に異例の抜擢を受け、政治に参画していきます。

その後、遠元が属す公文所は、鎌

倉幕府成立後には將軍の「政所」となり、幕府の中枢を担うようになりました。

1199年(建久10年)1月、源頼朝が亡くなると、その子頼家が第二代將軍となります。この時に、幕政は13人の有力御家人による合議制の上に運営されることとなりました。これが「鎌倉殿の13人」と言われる人たちで、遠元もその一人として引き続き、幕政の中心を担っていくこととなりました。

合議制の13人は、幕府内部に政変が起るようになると、失脚したり謀殺されたりと、徐々に姿を消していきます。

では、遠元はどうなったのでしょうか。鎌倉時代の歴史書である「吾妻鏡」によると、1207年(建永2年)の記述を最後に遠元の名は見られなくなります。1211年以降は遠元の息子「足立八郎元春」の名が登場するようになり、子へと職を継いだ遠元は、この頃すでに没していたと推測されています。

遠元は、政変が続く激動の鎌倉初期に、地位を失うことなく幕府の宿老として天寿を全うした武将であったようです。文武に優れた稀代の武蔵武士足立遠元は、同時に優れた処世術の持ち主であったのかもしれない。

※1 郡司：郡を治める地方官

※2 財政や政務を行う所